

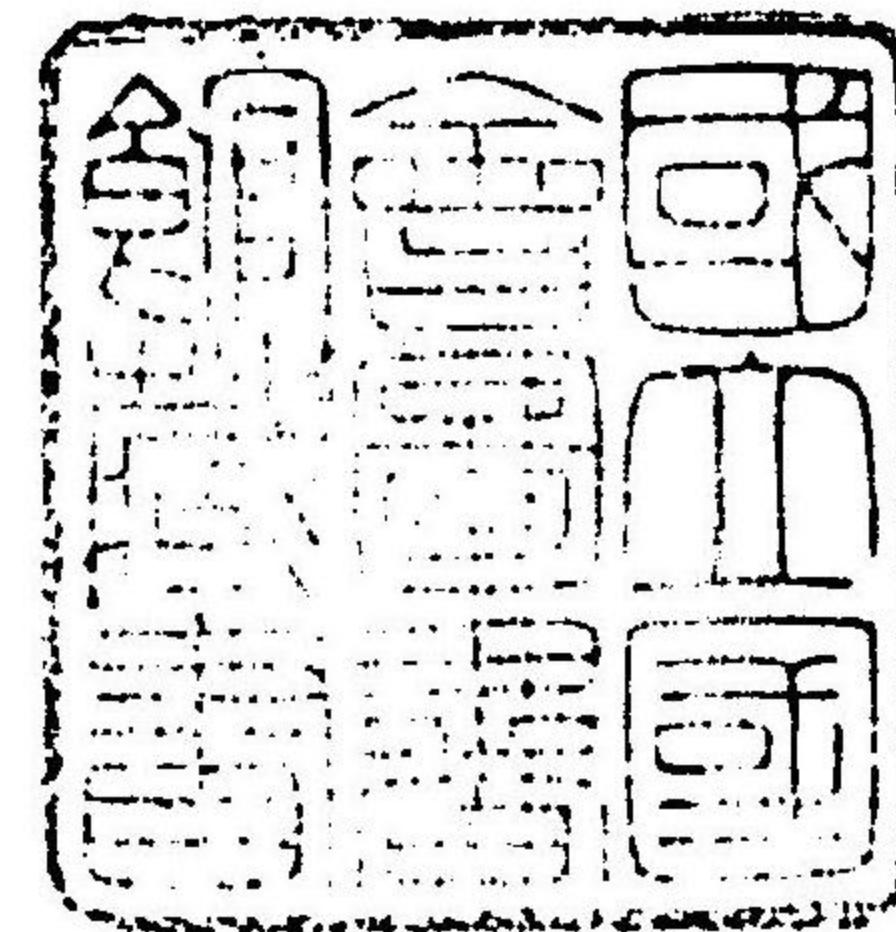


912.4 N 854;

井筒屋源六 懸寒晒 全

元祿十六年正月

西澤一風作



336914

西澤一風

浪花の人、姓は山本、正本屋九左衛門と稱する書林にして、寛文五年に生れ、享保十六年五月廿四日六十七歳にて歿し、法號は常譽貞寂禪定門、寺は大坂下寺町大蓮寺、其作に係る淨瑠璃中尤傑作あるは、井筒屋源六戀寒晒、北條時頼記等あり、錦文流櫻塚西吟と共に、淨瑠璃作者中の三傑と稱せらる。

○西澤一風作淨瑠璃本目錄

○井筒屋源六戀寒晒	田中千柳合作	元祿十六年正月
○傾城國性鏡	田中千柳合作	正徳元年五月
○木建仁寺供養	同	享保八年十一月
○頼政扇子芝	同	九年二月
○女蝶丸	同	九年十月
○濡髮長五郎昔米萬石通	同	十年正月
○越川屋竹取昔米萬石通	同	十年三月
○南北軍門答	並木宗輔合作	十一年五月
○身替弓張月	田中千柳合作	十一年四月
○北條時頼記	同	十五年五月
○本朝檀特山	同	十五年五月

井筒屋源六戀寒晒

作者 西澤一風

最月雨降りし昔と今日問へば。則今日が其苦。播磨の領主ふ宮仕へ。御家ふ古き古柱。佐々木源太兵衛と一擣。擣へし門に轍と立て。内は女中が粽卷く早い遅いとせり合の菖蒲拭も足につく。身ふつく仕事手に付くは。口ふつくるとなまめうし。茶の間のまんなひ名さへおせりと云ふ女。忙がしげに馳廻り。是は扱未仕舞する。旦那様の御留主の間ふ。卷で仕舞との仰付。殊ふ伊勢のらふ客も有。又叱らしてたもんや。十三つぎのだらぐふほつとした。是程の糸の糸つじぐちくとしまや。又茶の間の茶椀がわれ出した。つじぐちくと喰事ならわが身にや負ぬ。包みまはして帶びして握つて見るのも隙がいる。こちと等は半季居委ひ事は知らぬが。此お家の若旦那が國のうみのお手うけ。お闇様をやらせてくくりあひ。下手が粽と巻様ふ解たり巻たりつゝむき出してひよんな事。連て欠落なされたげな。今ハ粽同然。菰でも着て御座らふうと奥様の御案に。痰病の起つたる日比のお勞れ。夫で思ひ出した。大坂の引賣が來たら今日も呼べとの仰付。めんようあれ

が疲切りで此中はお心よし。歎醫者にこうぶし賣ふ來たら知らせとと云ふ間も近き表門
且那お歸りへど。下部の聲は先走り。そりや方付と立應ぎ。取仕まみてぞ入りにける。
武士の行儀は白髮迄。堅いと味ふ喰あふた。女夫の中も出向ふ。夫佐を木源太兵衛門曰す
りえのみ顔くすぱりのへつて内ふ入り座るや座せず。シ奥見れば表ふ幟と立て。甲の毒
きわみや何事。尤以前は源六と云ふ世悴と持ち。子と愛せる親心幟甲の持も見ぬ振りし
で暮せしが。不行跡と見限り勘當せしは去年。今では子も何もおじやらぬ。殊に幟と云ふ物
は光仁天皇の御時。異國の夷攻來ると怖恐れしみ。勅諭有て町人百姓迄幟を立て軍勢の如
く見せるけし其儀式。年ふ一度立るとは町人の事。侍は常々心ふ甲冑弓箭と飾り。胸む幟
と立されば。源六が如く三がいの捨り者となる。馬鹿へしる事面倒な。取置めされと叱
られて。目に持つ涙押隠し。島の夷も山がつも子と思ふは親の常。其凶賊が攻來る迄。
幟と立て脅すも妻子と助けんはうりごと。如何ふも幟と立しはこなたふ見せて源六が事思
ひ出さとく謀計。何國に居るのは知らぬ共。最早心も直りつらん。何事も堪忍し勘當免し
て下されど。詫る詞の先打折りヨヒナおばゝ。へをへおも志やんか聞ひぞ。其方の甥の八

十之進。國の用事と幸ふ伊勢より下り。勘當の事云ひ出せしと。心底明じるつきりならぬ
と云ひ放した。武士の風上ふ置れぬ人でもくいでもない奴。悪くへちまつたら見付次第た
つた一打手は見せない。血くさひめふ合ふより寄り付のぬが仕合せ。おどやれお茶だべふ
ナあいへど。連て奥にぞ入りみける。商賣の種はこぶしの子なれ共。親の勘當受けし身
のをふきやうが潢てせうの粉ちりくり包む頬蒙。難波ふ仕出す井筒屋源六。我名も直ふ佐
々木源六。名も合ふた同士さし荷なひ。賣とうとくて母親へ。夫と知らせの慶張上。都町
々と隠れない男。井筒屋の源六。交りなしの引賣。若じ殿達の眞み薬。音聲清氣散。白砂
糖黒砂糖氷砂糖磨砂。でつさり坐つてさわざれ。山椒の粉胡椒の粉。肩せい。山椒の粉胡
椒の粉。肩せい。是の小娘が。殿御持つやら鉄つけて鶯子の粉あらい。引た鶯子やあら
い。召せや召せへ。やつこのへこつちのへ。名物と賣ありく。
門の内より腰元立出是引賣。待ち兼て居る早ふへ。わづと答へて荷と下し。こりや彌介
此御屋敷は隙が入るお主は城下の家々へ。和中散腹藥氣付ふ奇妙と賣りうけて。佯爲た顔
で一服づゝ鶯子の粉と賣て來い。抜れてこなと相手と走らせ。こはへながら門の内たゞ

つすがめつ差足し。親の勘當請けし身はごうの秤ふに乗る心地。そつと忍んで身と縮ひ母は我子と呼ぶ子鳥。夫にも云はぬ篇の。口にたまれば目に漏れて涙と共に立出る。源六首尾よしと近々とさし寄り。此中も申すごとく勘當の訴訟。おつまやつて見て下さつたが。佐々木源六が井筒屋が引賣と身と粉ふ碎ぐも。勘當の願ひばつらり。尤主人の御妻ふ蘭と不義致したは誤りなれ共。御奉公に出ざる先親の内うらのなじみ。伴之丞は役義も簡略志まつがた。末々親仁様へ申込み。舅に取て不足なしと存じたが分別違ひ。今試つて改る本心。親仁様へ仰られ幾重よりく御詫申して下されど。手と合すれば手ふ組り。頬まみど知。伊勢參りふうこ付け出國して行方知れず。御前の首尾はよけれ共。皆源六が出来と家母ふ如才が有初ら。其ふ蘭は親に似ぬ利發者。お主が家出の其跡で浪風たゞ遊み隙。脳中の取沙汰。親と親とのいきづくは上べは九いが心はひしがま云ふた斗りで合點がいくま。あれの誠見や。今年も替らず立た心は。親仁殿の目に掛らば。ならず者めが形見じ。や源六めが形見じやと。自然と心の角も折れ。云ひ出しても下さつたら夫々がみ勘當の願ひ。只管ふこぢ付ふと。能はぬ智恵の裏喰され。云ひ出すとたつたのみ。三七年添ふ自

に優い詞を云はぬ人。夫も心で語めて胸で濟ませば済みも志よ。濟まぬ其方の身の上を。思ひやりなし親仁殿。見付次第に一打と免る所じやないわいのと。縋り歎けば力も落ちぬと泣入るばかりなり。時ふ表ふ頼みませふ。源太兵衛殿お宿ふうと。案内するは源六之丞南無三寶。見付られては六かしと立忍みと尻日にかけ。つゝと通れば一間立。源太兵衛。出向ひ。互ふ墨付悪き顔。女房見るに氣の毒る。お茶上ませじとあひじらふ。是源太兵衛。貴殿と某よからぬ中參る筈はなけれ共。又御用の筋は格別申そくお聞かれ。此度御用金八百兩御家老より仰付られ。村々へ割付取集むる所。貴殿の支配農田村水頭と云ひ立割金を納めす。さつと云ひ付様は様々なれ共高が算盤ふらゝる事。金るへ出せば云分な。公用知らず秤目知らず。百姓といため金と取事猶存せぬ。金銀の才覺肝煎は貴殿が云立の奉公。素町人が侍になりあがり。指付ぬ刀と横たへ。算盤のんりやへの役義と勤る。此源太兵衛が役義はそはと云へばお馬の先ふつ立。如何なる強敵大軍の中へも割て入。搔首ねぞ者分取高名。殿のお命ふ替る奉公。筋が違つたお歸りやれど。一口もやう込まれてもつ

とせき土。古長な源太兵衛。伴之丞が以前町人で有たと棚下しする。よひへ北方も又棚下しする物有と。隠れ忍びし源六が胸ぐら掴んで引出そ。母は驚き暫らくと隔てあると突飛ばし煙蒙引たぐり。お見やれお身の世絆の源六と。聞に驚く源太兵衛。愕然せじが弱味と見せず。粗忽なり伴之丞。世絆一人有たれ共。勘當したれば赤の他人見ても見知らぬ。見知で武士が立物うと。氣と張弓の弦音あ引れて母も寄りつるす。伴之丞ゑせ笑ひ。そく抜くと思ふた。源六。逢たりつだふよ來たる。身が娘のふらん大殿のふ目に留め。御意に寄て指上。後々國の守の御裡と誕生せば。末の樂み活計。歡樂と悦ぶ所。内緒で口とべらむ命。胸の八算をはらうと連ひ。見「無頭三九の」。一も取らず二も取らず。鐵面一で引戻し。御取らせ伊勢參りゆるこつけ。國をそびを出したは己が惡者意をうけた。不義者の人のをわらし。一九がぐの共下みて見よ。蹴倒し土足ありけ。躍だり蹴たる腰骨も。折れて退よと打擣を見るふ悲しく母親が。わせれを父は白眼つめ聲を張たる所となり。伴之丞源六と猶引すべ。武士へおこらせる躰節。創りむしの腰骨と勘當だじゆはむま過る。娘が行術云々とも云ひをさへひだる云々す。抜せや」と聲を。引まど

れども量の科處。道理に向ふ刃なし。手向ひもせ交渉居だむ。母は堪ひ娘夫の力も取れず。解放を実遇れぬ。是が堪忍なる物のと。又取付と腕提上。すうと据たる胸の内。源六は身を身とあせる。折節街入士之進國暇を爲。家中廻りて良りがけ南無三寶り走り寄る。伴之丞と押送源六引立後ゐるこひ。是はへへ伴之丞殿。定て御息女の義を付源六と御詫義。源子は先達て源太兵衛殿物語御立腹皆尤。お闇殿の家出源六は存せぬ共。未だ且の親より知らぬ共申されず。爰は某取扱ひ。面体知らずとも闇殿と尋ねだし。手渡し。既度仕らん。夫源六御預と。余はらで乘すれば。主八士之進殿。伊勢木神宮の名代をもる人偶久をねじねじ。人商人の源六詫議が残つて殺されず望みを任せ預置く。娘が在家知れなれば早速に往進あれ。源太兵衛。御用金の義は己が邪魔仕。相調はずと申し上の覺へで居る。相調るを立てる。伴之丞待て。用事あり。源太兵衛刀ばつ込。もふ云々公事は夫ばの事。そのらが濟たら此方のらばくこと有と。抜打るむね打平打三三十撃打る打倒大の手ひきも打れ伴之丞抜もやらず。狼籍御用の者と相手うと。御用とのしも聞入れず。娘ひは腰を立ばれ。妻の男と源六が悦ぶ顔を見ては打。敵う倒して聲あらへけ。何と伴之

過るだつたり。猛籍者とは己が事。勘當したる他人を引出し意趣と曉るは所も有ひ。武吉の家業の門の内とて、鼠と思ふる。一尺の繩引張てもよけて通るは人のとき。難儀も作法も知らぬ奴打すべだが誤がり。見ず知らずの口論でも利と利ありのれば小腹が立つ。我子の源六は勘當。親でなし子せなし。赤の他人の此若ひ奴聞み駭づれ。無念に有ふと推量也。他大故も肩を持つ。武士の意地はめんやうな物。ほろくと涙が漏る。目とじはたゞく思愛の父が心は痛む。碎け目ふば見えねをぐりのゝ。母の涙は大海ある。余りとて源六も少しおどかしやう。八十之進立寄り伴之丞と引起し。以前は源六折ひ今は貴殿の折ひ。傳ふ松木とおじきやなど突出せば。おじい段とのお世話。源六打たば持返され算用つ。源六は三郎が三郎をうながす。是八十之進。何事想被送なし國元で出し無用。ばゝ其他人めどの足りぬをやれ。おぞ見とひなひじやう。面めどりのよ白眼を入れにける。母源六が手と取て。八十之進も引渡し。其方の親御氏自が兄様。此子と其方は從弟同士親ひと云ふは他人向う。沙踏せたも忍もあめつまぬ。向道ひ身の衆ども落付だ。勘當免るは定の事。似合の縁を取詰め居間

が事を太めたり。思ひ切らせと戻したる。氣の細ひ笑つめた生付。最前むらむ立ばゆうぞ物。古も往來はぬ。某の根が可愛ふて。其方と見込も置るを。用事仕舞と聞かや。お身分遣て移り入るを。頗むぞやひのと有ければ。尙が叔へ粗略教さん様も不思。某發足を申して三五日の中。只今あら預り。鬼角よひやうお仕らん。是源六殿御相之。海久何はも申し度せぬ。只親王様の御機嫌と。まめを居て下さりませ。云ふがくだ。心直毛ぞ。御書の発るまでは死にやせぬ。伯父様や八十之進も見限られぬ様にしてたま。心よりあるは是一々八十之進頼んだぞ。ひけく。參ります去はくと涙の別れ。長を別れるはもじをき。知らず知らぬ親と子の心うるひど。唐子

中之一卷

ひづくはあれ也。神風やえきなみ寄する伊勢の國。六十餘州み生と受けあは萬石の人の數皆此神あらひまくる。諸願成就の宮巡り。見の浦のはらひして。内外の宮のあひの山。瀧の轍さはよごに落れを名もたへぬ。ゑいそれよゝの駄をも竹柱。築くを渡す軒の妻をのあふれへはうひだじや。でんちら羽織じやんと着て。おとなちらへそりである。お

はやらけおび引結ぶ。うちらおのこあや乙女の袖振りはへて行合ひの。ちぎのあたをきま
れり。是神さび渡る夏木立。うちへの日數み引そまき。廿一小藏の宮移し。丸き柱みゆや
の屋根。五日十日のときと知る。雨の宮風の宮。五殿豊饒のしるしとて。漫らぬ空は久々
たの。朝はみ日よみ西の宮まほのひるこの御社。元なれらの神なれば釣竿と町のたが。
沖へ船出せく。鷺る飼と釣はよ。この釣た所は面白いよの面白や。天の磐戸の神樂歌。七
丸御守の合せ物舞の城とても。そのなまや姫子松。青海原の風なみも。住吉よつの
宮新わうの守りのめぬかみ。先も和太玉としゆ。夫婦林青のならまゆ。那須の妻あ時草細
繭のび絲綾うみ北衝火程也。此山御邊の神垣や。杉の頭をゆ運動す。云わのしめえの守
護車。語ちゆつ財要事蹟ゆ。是もありゆるものとめぐらしく秋の錦の色女と。袖や道裙ゆ
明菊本。丈又較次て虹田垣あも壁としと見見え分ぬ。森の木の間林ある。燒脂燈奉祭
の油を運び度心局のとてまめ除し。燒脂燈を運び度三脚。改暦しや荷輪の花火を燃ゆ。紅葉等
あも歌子御山御神のはみ翠ふ翠ふ秋。せみのおが殿のあ家ぶもの御成多賀社。木等
地主大萬代のまつのもとある北野の神。袖の向ひ鍋森の宮をたのねば不夜祭みれ程。板

お詫花を奉る。春賀山。月影を出れ。店帳の。外幅員みつ。御座の。印ある神の御退の。毎年。御馳め
御社御神御道水。結手毎年。社やたまの。の。本に立る。此虎。久と臥て立。角威神。古
吉。今も至る道。三十文字余る。文字の。詞の數は八種なり。出雲の。東洋の大社。要る事
も。うみを。御札。八社の。事。波が。山。わち廿七の。宮。要。又。是。白髮。老の。あ
げ。云。見る。のみ。也。滋賀唐崎。松高氣。不見。の。み。ち。山。八十未。社四十未。社。
本國中。あ。波。御。御。あ。ち。る。を。安。に。多。し。て。宮。廻。若。命。浦。定。起。伏。拜。多。の。道。者。の。其。中
に。入。御。入。舛太夫。の。道。者。衆。是々案内。若。物。問。は。ふ。入。舛太夫殿。案内。若。源。六。と。云。又。次。殿。女
き。る。と。問。ひ。ければ。其。源。六。と。申。そ。は。私。何。の。御。用。で。御。座。り。ま。せ。と。源。六。殿。とは。御。自。分。り。別。の
用。で。も。御。座。ら。ぬ。我等町内三嶋屋。と。申。す。内。の。ら。文。と。こ。ど。づ。て。必。々。源。六。と。云。ひ。と。尋。ね。
寄。る。届。け。て。與。そ。の。頼。み。御。自。分。な。れ。は。重。量。と。紙。入。よ。り。取。出。し。届。け。れば。止。書。願。で。頂。き
く。由。程。錢。金。拾。ふ。た。額。日。頃。打。絶。便。が。な。さ。に。胸。の。岩。戸。が。ぐら。み。し。に。此。文。で。な。つ。ば。あ。そ。則
と。之。聞。の。裏。曉。て。心。面。白。く。や。と。神。の。心。も。晴。渡。る。天。の。岩。戸。は。此。方。へ。と。又。案。内。して。道。を。や
。然。ば。紅。絞。う。や。の。手。は。赤。く。た。そ。ん。や。の。手。は。黒。し。と。う。や。神。ふ。染。ま。れ。は。心。ま。で。直。な。る。道。の

街氏。八舛太夫と云ふお師の館。引續いての太鼓打。室内ひいへ神樂の笛の息つき間なべ。うのたりまふたり入て來る客送る客。此頃のくみしめ繩。袖引はへて賑はれし。後に和光の日足をとめて佐々木源六。未別家は持たね共。八舛太夫が簞八十之進が妹婿となりぬがる。大もんあらけ鳥帽子萬度のふ被片手ある硯。のちへ出る立腕脇の中廣間皆人にはなし。因きのる是座し懷のら取出せ。文の土薗源六様參る蘭とはねたは有難い。參宮人承るとうでる比尤。つりへと内へもおこさず。八舛太夫が所で源六と尋ねさせ。密か相手出す成案のきよだ。ゑいと悦び。押開ぐ庭の物見の戸。慶元のお捨ねわだ出づ。源太様及弟元を。お洗水の御供頂く様あらぢや御さんすの。櫻花を落は。爾乃行は。是立字近義經あゆみ。丸である。政野柳谷に在云はふ。可笑やと走りゆく。是女共お詫びて衣を拂は。是女共あらし書は。昔が勢らぬ。御なりうじるは海山春の。達を観たるに拂せ。春あらし。あらし。あらし。ちらし書は。昔が勢らぬ。御なりうじるは海山春の。達を観たるに拂せ。春あらし。儀。體少泥本どもえしやせがついたら猶たまるまい。此先の季のら出替ひし。裏門裏の自由ある成る所る斯り坐らせ。アリアリで度。めし。尤智惠のる。此文山の神が本家も何

とせう。此ふ懶そく所はなし。是迄の文玉草火ふはく後夜は密と櫻花を。火を當れども。火をねぐる。なにに煙りとなし給ふ。恨めしや。中村七三が邊聞が教ひいた。甘味を喰取り跡とほいしよと。引裂きく口ふ捺込み押込で。燐はる紙を神代甚は秘密と謂ひ。萬度の板。封べ破る。千早振る内の大麻取出し。大事ふ掛るば何じややらんは白紙色の物。内折捺込文も添。元の如くあ封びと折節門に頼みをせう。物がたぐいと配ふる。通ふ者へても。口ふ燐ばるうみが筆や聲聞。れば門口ふ。頻お物がと頼みをせう。通ふ者へと通さ。勝手より立てる下男。源六様其所お居でなき返事して下されませ。通ふ者。耳の余所。は。元の人間に隠して御算用の天秤が入るなら貸しませよ。と。惡口聞も耳の余所。は。元の十之進出向ひ。是より使と以て申入れんと存する所。却て御出。恐る。急先此方が答誰か様ふしてあたふた勝手へ入りみける。案内は同じお師仲間。四郎尤郎太夫廣聞に通れば八幡草盆。お茶持て參れとあしらへば。いやく。寛と罷ならず。兼て申入る如く伊勢の問屋方多く去年の類焼ふ依て。いふく。今年は土産物の手づのへ。諸國へのお種配。例年とは二三ヶ月も延引。京大坂の旦那方は御合點なれども。西國方在方は堅ぐるじく申譯も面倒

お捨が見付で私に知らせた。ほんに源六様従弟同士と思ふ氣が有るは。他處を公房ある
持た百姓も可愛がつた。吳服をそ。わしとひりあらわら其事之間で。はるか遅く候。候。是日は早
るも甚だ。年若ければ弊氣までとがせぬことを願せば。豈其従。むな假に。は。知行取の娘。あ
縁組。國に。想つうと家へ踏む伊勢五界は。狼狽す。錢金の有り余き。家也。安樂。惡狂ひ。高
③知れた事國へ歸れば。それも矣。少。些。との事は。堪忍。おじやれ。格無妨。お家御未だ。想察故
の出是迄の心遣ひ。日向の水。貞じをほら。が大事。それよ親仁様。太事の用。有忘れ。御詔
言ひ。捨て奥ふ入みけり。まだな兄様可愛ひ者。可愛ふあいか。妹の見ゆ。な。代。夢寐。見な
がゆい。人目がなく。は夜も晝も吸付て居たいもの。格氣せす。お置。よう。兄様が留守。残。な
たら。留守。お托け。よと一寸も出そよはいのと一人言。梅よ。お挾箱持て來ひ。捨よ。お小袖。
紙子初穂は駕籠で召し爲出し。置ふし。元結。有り。収付。有り。お煙草は大坂が能い。途中で
あたる程切つて。無ばかり。切して持て來い。此源六様何處。お何しそ顔出。しも。さんせぬと。見る
る勝手より。小腰と屈め。大坂お供の下人六介。此萬度のお祓。私が荷物。お入れ。そ云ふへ
届けて。これと酒六様のお頼みなれども。着替は先達て御荷物。お付けて遣はじ。僕は着の儀

。お挾箱へお入れおされと下されませ。戻外ながらと差出してちよこへと走り入りお跡
る。大坂で御念比のお方へ遣のう。兄様差置き六介と。頼み事のと取上る萬度のお祓。是
は扱重い事。是は扱替つた上書。大坂上本町三島屋佐渡八様御内みて。おらんじの參る源
六太夫。ア此らんとは聞たよふな。それへ彼女。腹の立つ何を入れて遣ぐ。兄
様へ是を来て見て下さんせ。是が腹が立まつた。けしらぬ妹何事ぞと立出る。是見な
しゃんせと投付て。聲とも立ず身慄し挾嘲へて涙り泣。此お祓が何とせじと。上書讀んで兄
もびつくり。何にもせよ明て見んと引解く萬度の内。入れも入れたり伊勢の名物。米菴
の女足袋と文一通。はじと手りふ兄弟が顔見合せて差條伏る。舞や止りも勿体なき。詞な
き入るひつの間お父の御師八舛太夫。後に立て肝づぶれ。そつと取立退は是は是見縛又
びつくり。悪い所へ善ふる出なされたと狼狽騒ぐ。八十之進源六と呼る。長めうと覚上の
いや兄様より私だと。立んとすれば娘動くな。八十之進源六と呼る。長めうと覺上の
そこへ立すと呼る。源六殿と。親が御目を掛けたと申す。お出なされ源六殿を呼する。
ありと答へて何の氣もなくひよるへと立出。是はへへ打拂ふと何云御思案。阿波々付する

。八十之進殿女共御用は如何。御用を答へる裏をみ壯馬の口を塞がれ。是を來
失眉と。はり。源六近々。此太麻と。おきしの女足袋を入へあらむ。やのへ見よと取出を成る
。是は何として御手を入りし何様してと。赤らむ頭に袖襷ひ六へも入りたき。其風情の風情
神殿の修復破損かは。屋根に上り御殿の入り。たゞへへ詰極す事有りと誰か。教養教養と
云ひ内清淨外消静の祓を以て恐れ祓れを祓除く神道の秘密。等開の及ぶ所ある。祓除
知たる所有つて。太麻の足袋を入れたる子細聞んと有うけれど。身内に致る計無。御木を
以て締出を如く。只はりと戻り返答もなく立ち去る。八十之進取扱ふ。存を不思
考は重罪法を犯すの義もあれども。當所且て不案内。正直の知らぬ處も崇む事。禮のを改
めらるる禪の事勿れとも申す。某爲と申聞を。古度の垢穢身を拂めたる事無の御御神事也
三枚上るは先異へ。是源六殿以來が大事御合點の。殊莫大の御ノミ。御御名御扶の事
免て扱へるは品に劣るな兄様。それへ大それた不調法。是非兄弟を免じ御御免を御想
あふ手と想れば。父も源とはらへと流し。是を一點の社領をなべ世話御下。お行ゆるお立
れ御身此が見るに付け。源六が母の心の苦み。思ひ通る程猶大馬鹿の木便り向むかひ。未だ

はるに生れしは、一昨年。源六を守護て人をなすは伯母の孝之。孝之威、田舎をもる事無
必道也。須羅山に掛駒、木は秆は折るともあるま也。義と理を筋と立て、愚我無能の八才也。
進。已知行ふ眼を敗れ林修妻せみり。女房皆共お事ゆる御子母の御事
三千世界と尋ねるとも。日影の己が今、身に難の娘を送るべし。未だ妻せ重音み哉矣。余
命なき伯母の墨み叶へたしとの願ひ。免め角もと祝言させ。八神太夫が聖機。御大業也。
の敵ひ伯父がなせらと思ふ。己にすると思ふ。皆八十之進が志。想じた陽之詔も承る
したる。子供等携ふな是斗りは堪忍な爲ね大果氣也。其御板以河口より思ひ。否、天照
太神の御神体。天照太神と申せば。今日面々か誠く日の光也。至ら口方もまじて、古事記
す事の善惡と明らめ。罰も利生も頗る上也。忽ち來るを知らむる。其影を移し教へ、廣度
の太麻。遂ち心得て足袋の入物但しは薄き板の箱。中あ小割の木も有る達子の御事也。
は心利ふもせよ天子將軍を始として。日本國中裁を敵ひ此も板。己一人が法を盡す神御本
願。我と我身と劈くの死耻を晒す。恐くな死没得爲き也。神明に誓て己一人不破御事也
も思候ぬ也。伯母弟妹又如何可憐私也。涙聲ある甚矣矣也。極り泣め声を極見也。日暮矣

しやんせり。がそれが定なれば私や娘も安は嬉しかが。此との間をあ肌馴れぬ。お本縄着物
着せよが。いたへしやと起のなる。おみたる用捨娘惡人の肩拂の。おひらへお何の肩は持れ
手と取りて。連てお次で着せ替る。心は眩む鳥羽玉の鳥羽色の古風袍。夫は爲せる罪惡落
脱である。若替たる組のだらなし益体なし。直にお庭に立廻り。琵琶の圓丸が心しや流
れ。括けの器の取廻し。手走らし程女房が眼漏れ余る憂源。長居懲じて入木走進苦難生
れ起た。源六草履。あらへーー。立て草拂と親のたゞものぞ。お先見鏡を。お詫
は有功なから。従弟同士なり根が皆。草履堅大我供る。連る素の足を覗む。身姿の脚
と腰。井戸縁やは入井大夫。金長井の素面別當真底。木綿と絹の合織今朝の脚筋。お草
打流せれ。お着る縁へは其錦鎧の着縁。お見ゆ御用達。只者叔父が紫縫落せたる事有れ。腰
草履取馬れど。あんと云ふ外道女めだ縁切立脚らば。あれどお祭事身更換の脚筋を
歸る鶴ぞ。叔父が心を破り引裂説。腰縫半筋と重ねてある。御金鏡の袖縫。腰の腰筋
と腰唐の縫。うする。善惡は裏表。腰縫着せて見たから。鏡が美を。お見ゆ御用達の腰筋を
替わせる叔父が身を。成て見ゆとぞのとぞし。秋やおもは一回ゆのいだらの腰筋を

草筋ある。千早振る時垣越え。井筒のあら。おお井筒の口筋を。おお井筒の腰筋を。腰筋を
はじつ井筒。下の。白い。卷。行船空や都の花と散るひとの愛て風の風。おもむく五條通ある。大橋木の扇折手の扇形。おもむ
く五條通の扇形。おもむく五條通ある。おもむく五條通ある。おもむく五條通ある。おもむく五條通ある。
西海南津北腰筋の東は。御用度。お島岸越田源。太鼓や。御用度。お云久殿見世。お急ぎは伊勢の腰筋。腰筋を。腰筋を。
又伊勢屋とも呼ぶ。お伊勢屋。腰筋を。腰筋を。腰筋を。腰筋を。腰筋を。腰筋を。腰筋を。腰筋を。
腰筋を。腰筋を。腰筋を。腰筋を。腰筋を。腰筋を。腰筋を。腰筋を。腰筋を。腰筋を。腰筋を。腰筋を。腰筋を。
おもむく。吉波に。お叶は。お叶は。お叶は。お叶は。お叶は。お叶は。お叶は。お叶は。お叶は。お叶は。お叶は。
お叶は。お叶は。お叶は。お叶は。お叶は。お叶は。お叶は。お叶は。お叶は。お叶は。お叶は。お叶は。お叶は。お叶は。
お叶は。お叶は。お叶は。お叶は。お叶は。お叶は。お叶は。お叶は。お叶は。お叶は。お叶は。お叶は。お叶は。お叶は。
お叶は。お叶は。お叶は。お叶は。お叶は。お叶は。お叶は。お叶は。お叶は。お叶は。お叶は。お叶は。お叶は。お叶は。
右衛門。お日出荷作。それで仕舞や。此御荷物喰の長屋。おと田の井戸の傍の座敷を置く。是

八十之通が度々見事人の見る目。うちとが見せみ身の悪者。其の後も度々見
えた。而びにひ其の身。八十之通來て出で。又源未出來いた。想ひ手向はぬ身の
事もあらず。通來。而も居。病足もと接勞矣。最前と云々。脚震耳も聞ゆ。所由
事がんと氣は盡りし。仕方は惜けれども。申す所は彼が北詮方を失。所を失つて是が
此返報はな。且云ふ時如有る合點か。先借用の金^出及び本^利。是八兵衛^金
百五拾九取替てなべ。初尾銀寄木第^三通^申あたる所れば。是は見えづら
在御^通。置^ての半季^六十日取る。取らぬ御家來參。百五拾日也云々益相^{そん}めの事
也。是は止あるされませ。其算用は八十之通が脚ある事。八兵衛指^レす及^レ相^レす。
取替てねどりやれ。じへくも生^れなされませ。云ふる脚^わある事^ハ八十之通立脚^{シテ}相^レす。
聞^シしが再三の辭退。扱は此八十之通。すまそ^シと見侮り。家來あとの事^ハ通^シの事^ハ。
曾^七所^カ借^カて見せた。源六供せらと產出る。不調法異平^シ。細役^ハ其^ノ何^モ矣。是
是の事^ハある。何方へもお由なされ^シ事^ハあるなし。天秤^{てんびん}取出^ス。一束^ハ百五十六束^ハ百五十六束^ハ。其の外^ハ主^シ取^リ事^ハあつた。

人でなし男。性が。二年三年水仕の下女の中居の人に下さはるがなむられ。幸抱葉も
は何の樂み。大抵や大方の可要さいとしさと思ふて下さる。情なや其心をば知りどや。
金落したと聞くと其儘。情あるお主の見限りあるから云うと。懸はは心るべらみ。手袋の
八兵衛が。兼々惚たど口説き幸。日たれて百五十日の金下さつたら。心も體はふと云ふだ
れば。定なら源六が主の前。源六へと縁切と云ふたら遣ふと金見せられ。あんま奢欲はぬ如何
にも云ふた。其云ふたは皆こなさんが可愛る故。たどへ金取たとて云ふ事聞えり。八兵衛
より強い大名のお心ふさへ従はず。五年足すの奉公一度も身と穢さなんぞ此らんが。承安
術づれに解ふうらの。是非く疑はじめくは切らずと問ふて呉もせで。融い情なや胸懶な
ぞや。此上ふもまたいとしい。捨て早ふ逃さしやれ。萬ふニツも思ひ出を折あらば。題目
唱へて御回向。もふ物言はせて下さる。ナ此脇指抜て入へ。ナ苦しいと云ふ事。さも次第
ふ弱る聲の色。扱はと聞くに力も弱り。そんなら己が皆悪。うのタのひよんな事仕出せたら
堪忍してたも痛のろのと。勞はる眼も眩れ。されば前後不覺ふ取亂す。今死ぬる身に何因
託事。思の有る内影を隠して下るるれば。言釋は私が心ふ有る。早く逃て下されたのれどや。

く。可愛い其方捨て何の何處へ。直ふ乘掛つて己も爰で死ぬはいの。八十之邊が妹との
縁組無心掛り。伊勢と出ると其儘是と認め持て居ると。上着の襟と引解き取出モ去狀。眼
が見へば是見やれと聞いて顔を指寄する。よめたゞ私に疑ひさらうと晴た。己も疑ひさ
らうと晴た。そんあら元の夫婦の。嬉しさと悦びの心みづれて起直り。そんなら此方を活
も死しやんすの。かゝとおりふ痛も忘れ。絶り泣入る不便さと思ひ這れて哀れなれ。涙を
きこつて源六。悔んで返らぬ身のしたら。此上は今改めて和女と己。談合づくの死を認む
からん跡で人々ふ。源六とお蘭が心中せしと謠はれば。切て未來で逢頬の糸ともなり点を
ん。必々意趣で切たと思ふてはしたもるなと。歎けばからん頭振り。心中をれば、ハ哉苦
御様方。私が父様迄の耻。矢張意趣で。切た分ふして、下され。人は何だる云はゞ云
へ。魂もへ連立でば。五生七生盡せぬ夫婦。是程早よ死ぬると知らば。乞食非人以成
べなど。二人六所に居よふもの。悲しや苦じや南無妙法。蓮華の上で待ますと。法華の二
十八品み三品を残して年の遠の三途の川々を流れけるべ空しき死骸を取付を。わゆ悲慕け

ば勝手には。齋藤太郎左衛門ちよど。く。逢たい事じやいの。留守らく。何所にヒヤ。隣
ふの呼でたも。逢たい事じやいの。ほんふゑ。驟きの内に身游へ。刃と逆手ふ南無阿彌陀。
突立んとはしたりしが。去ふても我父母の養育受しは十九年。四年は叔父の世話となり。
廿三年の日數。八千二百八十日の其間。半時の孝行なく九牛が一毛も恩と報する事もなく
。骸と萬人の口ふ晒し。惡名と末世ふ殘る。親の罰の叔父の罰の。勿体なくも萬度の祓ふ
足袋を入れたる其神罰。業と是ざり是仕舞。未來と助けたび給へ。三世の諸佛と觀念し。
太腹ふ押當刀の切先。背に出る程ぐんぐつと突込で。がばと抜たる刀の跡。血汐ふ交る五
臓六腑。七轉八倒虚空と握み。積りし惡業今爰ふ死ぬることいぢらしき。亂るゝ心の其
中ふも聞き覺へしと力ふてよろばひ／＼刀と杖。井戸ふ立寄る足弱車くるまきたぐつてく
る／＼。廻る輪廻の釣瓶の水。一口ぐつと呑込ば。入ると出るとの息切れで魂宙有に散
亂せり。折節出て見る下男やれ心中よと呼ばれば。世上ふ響く取沙汰の心中とも又意趣切
りとも。思ひ／＼の手向草回向の種とぞなりにける。

井筒屋源六懸寒晒 終

錦文流作

男色加茂侍

寶永三年三月

錦文流

俳名を錦项子と稱し大坂座摩社の邊りに住を寶永の頃より西鶴の流と汲みて浮世草子と數多著せり人口に贈炙せる所の書は棠大門屋敷(淀屋辰五郎記ス寶永二年)熊谷女編立(因州鳥坂女歎討ナ)等數種あり淨瑠璃作者としては趣向筋立てはさしたる事あけれども櫻塚西吟西澤一風と共に淨瑠璃作者中文者の三傑と稱せられたり

○錦文流作淨瑠璃本目錄

- 東海道虎の石 元祿十一年五月
- 傾城八花形 同十五年正月
- 柿本人丸出生記 興行年月未詳
- 仁徳天皇萬年車 正徳三年七月
- 男色加茂侍 寶永三年三月

男色加茂侍

錦文流作

謹上再拜 敬て白す。神津川清き流の石川や。瀬見の小川ふ跡垂て。尊うりける當社の神祕。建角身の命丹波國。神のいのごや姫と娶り給ひ。一人の御子と產け名付て玉依姫と號す。或時此姫石川の流れふ遊び給ひしむ。丹塗の矢一ヶ流れくる是と拾ひて家路に歸り。床の邊りふ置給へば此矢忽然麗はしき。夫の形と成しより枕の數も重りて。一人の男子と生み給ふ祖父の命其父と。知らんが爲にハツひらの。家と造りて神と集めて。やしほの酒と醸し給ひ。七日七夜饗應ある。時ふ祖父御盃と。童子の前ふ据置て一ヶ飲て父あさせ。父やあらんと差給へば。うたふけ給ふ御土器。彼矢の前ふさし置て。第の豊と穿ちつゝ天に登らせ給ひしより。祖父御の名ふ寄せて別雷の神と號し。玉城一の守護となり。永く寶祐の御守仍て臨時の御神樂と。勅して捧げ給ひしは。玉林安穏長久ふ五穀富饒の御爲。なきう納受なるらんと。既ふ幣帛とされば。祝主は藤木富之助拍手遠く御供し。勅使と送り出らる、東帶姿懸々と。賤しららかる身の振は當代都に并なき。色の盛や業平もな

き世の昔を知らるれ。暫らくあつて立歸り又神前を打向ひ。やゝ頬拜て居る所へ廿歳余の風俗も。只の者は見ぬさりし被衣の物見はれらるふ。つひ男見る目遣ひも懶と含みし女房の。はした女子と只ひとり情なき水の誘ひなば。連ても行うん風あるが祝主の傍へ寄添て。何祈るらん妬ましき衣のうほりも束帶に。翻れうゝれともたるれば。祝主は氣と付折悪しとこなたへそろりと身退ば。又其方へ付て来る。彼方へ避ればあちらへ寄り遂に碌ふは拜ませず。藤木は男色立る身の女の色ふ醜ければ。耻のしひやら氣の毒やら御神前とばそぞくふ。神樂所の休息所にて。束帶脱んで若流の色はなどしも姿うな。番の換りと打見えて。三十斗の神官の故有氣なるが神前と。暫らく拜し入ければ最密々の挨拶し。につと笑ふて別れしは何様是が念者らし。女は猶々付纏ひとこその程で申。卒爾あがら些尋ねまし度事の有。私はもと大坂者此頃都へ上りまし。奉公勤むる者成が心ふ願の候ひて。七日參詣致まし今日が満參みて。心嬉しふ存せしが耻のじながら女の身。まだ今日やなそんあ事氣もなひ事と存し。俄かに拜んで居まも内身が穢れまし候が。神の御前の事なれば罰が當るで御座んしよが。去迎は怖ろし、何卒成らふ事ならば。お前様とば頼みま

と。神の御罰の當らぬ様にと言寄れば。藤木は誠と心得て何様女中の本心で。怖れ給は御尤去乍苦しめらす。それ神は正直の頭ふ宿る。殊更和光同塵は結縁の初め。素よりも塵に交はる神なれば。月の障の何をう苦しきと候へば。少も御身ふ崇りはなし。併いひなるは己が心と舊なれば。少ふても氣懸では心よりして思み懸る。成程私が御手洗の清水と掬んでも穢と拂ひ。清淨ふして參らせんと打連れ川瀬ふ立寄れば。女は石ふ躊躇して。ここは既の事ふはまるとした。今やらくるへと目が廻ふ様に御座んと。抱き付てはじつとしめ。是死ますると言ければ。藤木は彌陀の如く譯もない。私は色の兄分あり女中方のお手よりは。物も取らじと誓と立互ひふ意氣地と磨くこと。金鉄よりも猶固し。若も兄分見付なば卑怯な者とさげしまん。心の程も耻のしひ心指は忘れなど。情交りの言葉の色女は彌陀れて。何が扱此御器量で色の兄御が有まひとは。努々存じ候はず其兄分の候は。又兄分ふ成らんとは夫は私が無理ならん。是は宗旨の違ふた懲何の御叱りなされふぞ。まつこと腹と立さんせば宗旨と換へたと言はんせと。猶縦付く懲衣染ぬ先こそ思案もあらめ。思ひ初たが因果な懲素の白地ふしてほしと。打慎みたる面影や思ひ切らぬぞ愛き心。

斯る折節神前より兄分坂口備後が聲。富之助へと呼掛くる。恐れて思はず知らず袖振放つ惜なる。跡みは女只ひとり若しは便もあらざらん。此世の外の思ひ出ふ今一度の樂みと。茶屋の軒端の片庇人待つ女と看板と打たぬ斗ふ隠れなき。つるんぢ方の若侍高辻左衛門と言し人。奴ふ竹筒と提げさせて加茂の宮居ふ詣でらる。素よりもれば知だ中是故左衛門様。此中は如何してやら御一座も程絶し。叔今日はどうぞるな高尚な振としのどう云事と尋ねばされば此四五日は。氣色すぐれず引込んで養生がてらの樂遊び。其上歎此家来か心易う咄しが有。此衆と明日萬太夫顔見世芝居と見せまして。落は土手町菱屋にて加茂一色の思ひ付。其振舞の言入やら何やら斯やらで參たが。貴様はどうじや何とやら小由ひとりと供ふ連れ。如何様是は懸である。うち明て云たがよひ。事ふ仍たら爲め出ならをせうじや。へと盃と先づ一つとぞもてなしける。ものも見畢ふさうりと干す。を下さんせ肴み咄す事がある。お前も知てな事が有る此社家衆の其中ふ。藤木富之助様と申まし御若衆様が御さんすが。夫はへわの様な御容貌が有者う。又跡の月河原にて不圖した縁で見染つゝ。さうとも斯とも成ませぬ。思ひ切よと思ふ程漸くみ懸が強ふ成。

身も絶ふんと懸しと切ては知らせ參らせて。兎ふる角にも成りなると今も諂ひ我しまじ。心と聲を既得ば御縁う先程お目ふ懸り強う懸つて口説しが。念者の手前立などて愁ひ御退事なされじが。若しはと歸るを歸られず。虛々と待ちて居りますと打參れでを語ふはる。左衛門思はず手と打て。さな連は世の中の人の心は同じ物。何懸そとを此樂を免限りにとんと懐れ。故と遣り直々お心とつくし口説けをも。備後と言へる念者が有。其方が戀も身が戀も兄分の手が切れねば。いつのなく物ふは爲らぬ。則ち明日の催す此兩人と振舞なり。さて夫につき重疊の宜き分別が出ましたば。最前も云ふ如く。兄分備後が手と切れば。更りと姉のあく事じや能き分別とは爰の事。明日の參會ふくれら其方を呼ぶやろ。貴様は兄分備後めと深く馴染で居る様に。萬事差配とべつたりと備後と随分つゆふて居や。備後が氣には惚れたと思ふ。其心うら備後めが。初對面のら異な事と左のみは否もせまわは。さて藤木が氣には兄分が。我と差置内々よりゆうとは深い中さうな。思ふば惜い事哉と未だ若輩者なれば。何の思慮なく腹と立。遂みは大きな口舌ふ成念頭切るは知れた事。こりや其時ふは拙者が物。身共が手ふさへ取たれば。貴様が戀は請取て拙者が世

話とやく事じや。あの備後めがする想は滅多ふ固い手にて。何分衆道ふ味がない物別若衆と云者が。女房心と知らひでは實の所が嬉しなむ。然るに仍つて我等が衆道と云ふは廿歳のら卅歳迄と盛とす。其証據ふは藤木とば。左衛門が手ふ入て見や。其方ふ逢せて幫間と持色の大事と教へてやる。憚りながら男色の大事知人は有まいがど。又盃と差しければ想みば迷ふ心の間。くらな事とは露知らすさつても粹のな色知りうな。よいのうなばく何様ふしやんす通りヒやは私等も勤の身にあつて。初心な内はほんぐの情の邊と知らずして。客が最愛い者ヒややら男が可愛者ヒややら。床入せぬが嬉しうて何の別ちもなのりしか。きごとの程のをこやらで日本國が一所へ。よる程なめに逢ふてうら想と云事わきまへじ放迄に。信度備後とのけて見しよさはひ口ヒや成程我が飲込んだ。こちが仲間の傳授みてかしたの晩の四時。こなさんいのい譯知りヒや成程我が飲込んだ。是で一ツと差す所へ藤木は傾れとの御使手と存せふ。是迄御出下さる段近頃以て恭しの備後殿ふも御と手せん參つて御禮候すが。只參る換ひまじ神前勘むる事なれば。暫時も下在事なら。お免角積御警夜しき。

も。御禮申吳よとの御傳語おて候ど。物屬きやしやに愛嬌有。身振品よき座敷体にづれ古今の男色なり。左衛門殿々聞居。拔々是は御念のりる御懲懃なる御出。明日の物は風情なき御事みでは候。共只御氣暗の御感幸。而指む病氣故奉た。引を罷在。夜の暖簾透闇の底。あと御酒もたし度考ひなか。初先みなみた。は是文體。尋ね竹簡御辭せば御守い御鳴な焉。且うじ。將又是なみないる機は。土手暖み。隠れ音の表裏より御身の機。ひの織合。左衛門殿。御一坐御出逢。先斯々並べて是た時は梅の花。櫻の花盛。す。ひやくは。一臘満にじき。暖簾が前とえよらぬ。坂口殿ふ表も氣体もが。せ見えぬ。先兄分の交渉せ立させ。鬼角積中と裂く合點。想故思はぬ物。工是惡心の始なり。ゆふは今更脚寒り換機迷走。落行。暖簾がぬ舟の寄邊なき心のたけヒ口説うんど。思へを明日の夜兄分と駒染た振の廻東。ゆ。つうへてくとくふ口説うれす。しんきやと思ひ川水の月うやありながら。手ふを取られぬうき想ふ迷ふた盃あらためて。富之助様あげますと然しものもうもおとくと。心震はす想風の寒として來る耻うしな。藤木も盃持乍戻すも堅し殊ふは又。されぬ想の下心此方へるゝふも兄分が。同じ座敷ふ居ぬ内ふ心と懸し男ふさし。後日の叱りも恐しくさす

もなれず戻しもやらず。あぐみはてたる盃と。兄分備後が遠目に見て。是はへて天目で
けうどひ酒の飲様の。女ふや差す左衛門ふや双方共にさゝれぬ首尾己れさいたらしくと
常々格氣深き故。茶屋が出床ふ呂と放さずうのく見惚れ居たれ共。狼りみ神前下る事なき
さる拵意地わるく。行度うはあり行うればせず鳥帽子狩衣のなぐり捨。傍なる腰掛弓寄せ
て後姿と飾り置。既に彼所へ行うんとす折節多くの神子巫。又御神樂と立出ればばくと
書き大歎の桺。足あはさんで打隙ふ鳥帽子狩衣たりつくる。姿は爰に氣は外あ。まわの空
なる御神樂と笑て。こそは脚りけれ。一陽めぐみ来る春の。花の顔見世わざと又改む
る舞臺。舞紅は色國の。中み舖ても隠なき大門高く梵天は。勢あつて勇みおな太鼓の音
成そりがちと。人の心も浮立て景色異る林歳。古參の新参の。歌舞の品樂火盆樂を
ろべら也せむ。精をるべの見世はしどり。あしたみ霧と拂ひゆも見ゆ南を感せり。御名拂
毛高達左衛門成契約達之所なる。頗見世芝居見物に機織酒の色醸じゆる。三人皆共通室ふ業
今ぞ忍みのきのうま。床凡て畳みを助けぬる。田舎武士三人連にせきおと對よ
8遠慮無なげふ腰を掛け。富之助が持たる茶碗をおつとつせ。恐れ多ふ事業の接続

がある。御自分達も申要る所をなじて通されよ。又次替れば、左衛門の頭を取らるゝ事ある。
銀籍千萬度承及び迷惑ならざる品なれど、備後は亭主の氣を兼る蘿木は腰を定めり。遂もそ
互に先の了聞あすへや目と目を見合ひて、身を休め居候事也。胸を想候事など無く、通書
近左衛門居直て。御自分方も、侍北方共も、向む事。居士も、たゞの用合も、近頃、未だ音信
様。少申分縁へ共。今日拙者、が亭主より市外の衆は御難なま。難事、主張候じて、御難事
萬氣の難なむ。尤御酒機嫌では有べきが能ひ頃みしに、通りあれ。邊境の口、明るは、お尋
ね爲み成せらがと事と含んで言ければ、侍共冷笑。いや興な事の咎め機印となるが余難の
亭主でも客に召れと云ひはせず。我等が酒も醉ふたのは、手前で醉た事なれば、誰も申さ寄
様もない。無益事じや構やるなど雜言たらば止まされば。左衛門編笠取を捨反打掛ひと
つと出で、推參なりとつこめら。一腰とよこたゆれば武士と思ふて遇ふに。様など雜言吐
くも免るぬぞ覺悟と極め。勝負とせよとつゝ掛れば相手も外へ走り出。森の如くみ立並び
既ふ事ふぞなつたりける。一人も横じて割て入り。畢竟是は我々がしらむる所で候へども
所も思し。御自分の心底と察しつゝ態と扣へて罷在。是非此段は我々が相方共に貰ひ申。

何分堪忍下なるべしと事と盡して抜のへど。左衛門猶々止まらず各れもお捕ひ遊ばし。おわ抜け抜ぬの卑怯者。但は抜てぶち掛ふる。ア抜け抜のぬくと眼と配て詰懸れば。そろひくと跡退り双方刀を抜かせす。只聲ばうりと懸合で暫しが程は位を取る。後急火事と人を片睡と呑んで居る所。三人共ふ假橋の。東詔より散へに遇て行術は本のすけあり。左衛門猶も追懸しが。暫らく有て立歸り。拔々尾頭な奴等が御恩みを妨げぞ。御持連延引致せじと抜ぬ刀の高名顔。汗を拭ひそつちと呼び。故に御案内申り大奥屋に御供。甲子年。執者は先刻慶懸し茶座へ。禮申しき。追付矣。奉の先の別役不承を左衛門直義の辭を察せぬ。所へ此事の相手葉大汗流と立候事。由からと御説明の御見聞も御れ侍を。年弱の者とや大が重けた取を。捨本袖と說ひ是れの者。達文の送交を御見聞の跋扈と名を取た。江戸坐する小屋の君左衛門税が打拂ひをき。御見聞が御見聞の氣遣ひを所見か。余程氣遣ひを所見か。お見聞入出を汎て。其中程だ。大内ノと笑ひがでよと内をば。余程氣遣ひを所見か。お見聞入出をりた。重疊の首尾仕ふふせた。申て元が侍役を見事な事成が。以前は何處で勤めた。お主の口を拗へ。私共は一年中江戸を勤めて朝夕若。武士のゆゑで勤りは間はぐまぢぞ。

慣れりあと。新様の眞似を仕る。又は那の御力身を腰の見はるかに配り。取扱別の事缺身の夫は其を其強る。毘沙門立と云者に立せ給ひし勢ひは。天晴原では珍らしかどを立れば左衛門は。何んと手強う見るがな。新様につよみと拵らべて見する丸腕角若衆の思ひりせん計略。去りとは衆道狂ひ程世の世話らしい者はなか。まだく是れらる趣取はざめこうなよれと相手みし。念者と退す仕懸事物の見事に仕負せて。自出度酒と呑はせふを祝ひは重ねて是は。今日の骨折代なりと金子三兩投出し。委細は明晚菱屋へ來い。弟子と語り聽のそぐし。去らばくと別れ行く。跡を續いて三人共小腰と届け一禮し。所へ立寄りて。三人鼎ふ立並び黄ひし小判と取出し。定めなの此金也。我世の有人の手ふあらば。數の服沙ふ包まれて腰や時めきたるらんが。今観昇の手ふ渡り頼み少なを身の上や。明なば錢に代なされ。綱目恥辱に及ばん事思へばく。口惜や。若しも金の利足ある。叶ひ復び小判に生と變。服沙に乘らん事やあらんと。世ふしほくと見へければ。鬼を欺く観昇も。實に道理あり理やと嬉しまざれの仇詞。跡は笑ひて歸りけり。河原面の夕景色。誠る四神相應の地景の中の暮景ぞと。春は諸山の花のくれ。夏は涼風さ夕床ふ。盃流せ

景色あり。秋は名所の菊紅葉雪の曙月の夜土手の燈火川面の。頬に照超て眩暈は浪とた
くうとわやまと。田舎人御都人色と情の行違ひ。袖の留伽羅こぼし合ふ。いたり姿やとる
るうち天姫さやさに見ゆる。扱も高辻左衛門は二人の客の対應と。もかが一節一指あ
盃巡る面白さ。暫してこそぐれぬめり。主人夫婦は神詣只今下向を座敷へ出。富之助様
備後様擅那様もう様今日は別して嬉しの御出や。一日歩て慰んで戻りて内の賑なは。物
言ひ力が御座んして。酒が飲み能いをれ。私が御酌ときつる。まきほひ懸れば左衛門は
。料理人作平ふ内義最う能は。少し客ふも物言じや。今日は皆様たまの事何がな御馳走申度る。
は近頃不亭主とむ客の前も氣の毒。はてどうがなと思ふたが。物ふは一の妙がある。内義
さうとは自慢としや。まやでも大きが能ふ出来る。夫で亭主のはうがそく命取ゆ是吉財娘
ば。主人の十兵衛夫は左様只今祇園町と出て。輪違屋の筋めや西いしゆけ立年あ。承
れば左衛門様見事な喧嘩を遊ばして。先も侍四五人連蜘蛛の子散らを如きふて行方もなく
なりし由河原中での取沙汰。まづは御手柄と吉は遊る果夢左衛門試。さ寧波骨筋不運

な事神ぞ亭主で御座らねば。見事な事どと思へども言へば云程無駄走じや。兎角は堪忍
くと心で心と異見して。ふ客方への御馳走ふ堪忍として通したが。何様明日侍と四十も
五十も相手ふし。心一ぱい餉うば何より面白うるべくにと。人と人共思はざる高吉咄をせ
ひらしす。ゆかは折節富之助相手ふせつて香くゆらせ。静ふ咄と聞けるが。下譯もなひ左
衛門様。擣て喧嘩と遊ばもな。どうやら怪我のありさふな危険物で御座んする。擣て備後
様。何した事が有ふとも口論として下さんそな。傍ら女子の心ではいろいろ氣違せる者を
。こなさんは柔和で。其氣違は助らつた。こちや寝て遊ばと寄添ひて。備後が枕ふ顔さ
しならべ。袖より袖に手と入て。いつ寝ても寝心の能い男めと。しめてぬる夜はなけれど
も傾城はそれ共斯する物あらん。うるさや若衆の心には妬しうるらん。やらしと。思へそ
苦界と勤むる者左様はふらじと。暫らくは添臥として居たりしが。漸とし起直り。炬燵
へゆけば寒いと蒲團引着せぐすくと。枕並べて抱きつく備後は猶々氣の毒がり。そこ
と立ば引留め。こそばへと何んぞいの。扱はお若衆へのこゝや御遠慮で御座んその。
去りとは不粹な御事や富之助様大事ないの。解の違ふた戀とやもの。何んの叱りはさんそ

まいが能いはひのと連れ寄る。富之助は差別も知らずと云て能やら挨拶も。わのら様には言はれぬ事うやうなりと能う様ふ。御勝手次第といへばへ云ねば胸むねふせぬのけて。こぼやばうの戀の水みずとめ兼たる風情ふうけいみて。枕引寄せそらねる。火ふうつるへる寢顔ねがほの艶つや猶うつくしくあでやるなり。主人夫婦は間と取て誰ぞ子供來いよ。富様に蒲團ふとんさせませくと夫婦は前後に入ふけり。左衛門さうゑもんも酒機嫌さけ疾めまいより假うなだ寝ねたりしが。むつくと起きて手と叩たたき。座敷ざしきがめぐる酒の燭ろうとそこなよね様も。些すこの間起おきて貰ひませぐ。叱しか人のある男じやに手數てかずと入て下さるな。何程世話よしわとやられても其戀ばかりは手ふいらぬ。せんしやうそるなどせりすれば。ゆるは腹立氣色はらだまきじゆくふ。左衛門様。私が戀こなさんとひけらうをではなけれ共。手入た印いんとば見て下さんせどそつと立。諸肌脱はだぬきいで下着しやくと見せ。まだるよね衆は今織いまおりの袋ふくろに入はてもたんせる。私等わしらが起おきてもな寝ねても放さぬ眞質じんしつの違たがはぬ爲ためのときでなり。左衛門うれしる手てと打うちてよいのなく思付。こちとも戀こなが出来たらば熊野くまのの牛王ごおうとそぐ様よう。心中染じゆうそと流行はやせて世界中せかいぢゆうとば起おき請うけふせん。亭主ていしゆと呼立れば夫婦ふうふもろとも座敷ざしきへ出。是はく仕出し物。ものごのみ様色ようしょくしり様よう。どうもくとの、めけば、ゆう

はうなしあ涙なみだぐみ寢顔ねがほ見み惚ほて立乍ら。おつてもすまたな浮世哉うきよぜ。仕組しづくだ事とは言乍ら思ひし戀こころは傍そばふ置おき。思はぬ戀こころに世話よしわとやく最早さいしやうじつとみしらけふう。廻遠まわるなる戀こころの道みち、近道ちかみちふ行度ゆきどといとと飛立斗となり。左衛門備後さうゑもんびごと搖起ゆきし。こゝ寝入ねりこた顔おほせまい。去りとは備後手びごてが惡あくひ起おき請うけと書かす程ほどの戀こころ。我等わしらが戀こなとは聞きへぬと盃はいと備後びごふ差さ。ハ譯わけもない。爾そした事は氣きもあい事。神懸かみかけましととならうと干あ。爰あな女中めのわらわも余程よほほで座奥ざわらわがやめて貰うけひたい。こううそつそと酌くちしければ押おへましたと突つ戻もどす。こ富之助合あじやと盃はいなせば起おき直ただり。顔おほが熱あついに免めんしてと川原かわらわの方ほうと差覗さなづつても暗くろい事ことのなま。心の闇くろの晴はるやらぬ思おもの烟えんとくらうりう。備後びご見て、顔おほが熱あつくば酒さけはよし。座付ざつけが惡あくひこちら向むかせや。身共みともが顔おほを見ていやと膝口ひざぐち取とて廻まわすれば初はじの如おくくるりと直ただり。南みなみと遙とほうふ跡あとひれば。大悲應護だいひおうごのうす霞かすみ、熊野權現くまのごんげんもうつりまま御名ごめいも同じひといまだま。稻荷いなりの山さんの薄紅葉うすあかねの。青あおうりし葉はの秋あき又花またはなの春はるは清水きよみずの。只ただ頼のめたのもしさ春はるも千々せんせんの花盛はなざか。人ひと一ひとり夜半よばんの夢ゆめおさろおさろしゆる鐘かねの音おと、百八ひゃくは煩惱ぼんなんの絆きずと切れきりを建仁寺けんにんじの。だゝりつき出す山さんの端は。白しらみ懸けれる。我わは只ただ憂うる心こころの晴はる間まなま。空そらにしられぬ涙なみだの雨あめ。振袖ふりそでくだくだと面影おもてかげや。無慘むさんあるのな富之助今日の座敷ざしきの品しなやと。

思ひわくれば腕塞り。居るも居られぬ様引やわづらふ心の糸。とくふと思へど然はならず月おがまんと座敷と立。哀れ涙の櫛ふ立わづらふと居たりしが。然るふても口惜や彼と見是と思ふ時は。兎角死なねば成らぬ所。思ひ切たり討はたし憎しと思ふ女めに。鼻とあのせて腹懶んと始終の工と夢ふも知らず。死と怠がぬる志是ぞ若氣の至りなる。備後は斯ともしらけたる酒のなればとそろりと立。是も土手より河原へ下り何處ふや富之助。風がな引うふが歸らひでと川の瀬毎と尋ねば。人とも連れず只獨り愁然として行めり。備後は何の氣も付うず酒が厭なら飲ぬがよい。如何ふとしても座が醒る。惣じて今日は不機嫌ながをこぞの惡いの如何したぞ。左衛門殿の手前もあり近頃不器用千萬と。言はせも果す拔討ふ小袈裟と掛て切込ば。備後愕き飛退りこりや狼狽者仔細と言へ。酒ふ醉たう氣が違ふたう待て早まるなと言ひければ。斬たる太刀と提乍らやれ畜生のちごしぬけ。能もくたらせしな。誠に十二の年よりも假初ながら兄分よ。弟分よと誓と立此五歳が其内。禮は誠の兄弟より義理と忘れず寢てゐらは。實の妹脊の契より漫らさりし中成に。同じ色であるある事う君傾城と見變られ最よ若衆の一分立す。殊更晝の口論元我らの事なれば

○左衛門殿より先立て其方が切て出べ峠と結句扳口と言ひ左衛門殿ふしてとられ。裸々と其場と退れ是迄來りし事共も。思へば女ふ心引うれ腰が抜けたる故みて有。爾仕た心と露知らず。此五歳が其間。心と盡くせし悔しよ。去るがら年月の好みと思ひ打果そ。とてもの事ふ太刀打せよ。最よ退れぬと打懸ればやれ待て一言いわせて呉れ。全く命と惜みはせぬ成程晝の口論は。我々兄弟切て出譯とば立る筈なれど。爰と一々聽て呉。其方事は近々ふ過分の知行と下されて。立身と致を事其方お袋一家の悦び。我々共も同じ事外聞方々實義共是程目出度事はない。然る所と僅かなる當座の喧嘩ふ身と果し。或は死なでも沙汰有て若妨とも成なれば。老母の歎も氣の毒暫し時ども伺がはゞ。おへ人出て濟ふ事其上刃は指たれど。今までの武士とも見へぬ上左衛門いらつとり立まる。早まつてもとそくてて覺へなし。なれ共惣躰傾城は心ふ入もいらざるも。ひとつたりと應接が畢竟はしやうばいなり。夫故名付て勤と云ふ身共々夫と量見し。座敷は首尾よく致したと段々事と言分れど。急にせるたる上なればいつの事合點せず。ヨン粋怯に御座る備後殿の女めは昨日も御神

前へ參詣し。私ふ様々懇幕と仕掛命も絶る計と言。され共誓と立合ふ節女の手より何ゆて
も。取らじと約束致せし故色々帳し歸せしが。叔は私ふ懇幕とさせ懇うらん工よな。左様
の暗ひ言譯で一分と立ふとや。存も寄らぬと打のくる折から左衛門走付て。是は一興千萬
と眞中へ割て入。様子はさうじやと尋ねば素より急たる富之助。段々恨と言ひければ元來
左衛門工し事。能幸と了簡し。起請迄あるなれば富殿立腹尤あり。お手も薄手の事あれば
世間体は持病と言養生なされ然るべし。最早斯仕た上うらは。立歸つて汉方共懇もならぬ
筈。事火急なる事なれど、富殿の御事は。某年來執心で罷在候得共。折と得されば申もせ
ぬ。貴殿ふもゆう殿と深い中との事なれば。時節もよしと存する故斯様に申セと言ければ。
備後大さみ立腹し。左衛門殿言葉とも覺へ申さぬ御事。時も時折も折。今此首尾ふ若衆が
何と遣らるゝ者成を。其上拙者が忍のないゆると浮名と立られとは猶々やられぬ所なり
テ富之助ゆうゝ事今一穿議して見よと。重て返答わらわれば左衛門も言懸り。奇怪なり
備後殿諸侍が年來の思ひと段々分て言ひ若衆と貰ひるゝ。成らずばよしとて置かれふう
呉れても貰ふ呉ひでも最貰はねば堪忍せぬ。返事はさうじやと言ければ備後も今は差詰に。

兎角の返事ふり難くこりやへ左衛門舌長な備後が息の通ふ内に取られふばとつて見よ。
互ひの刃先三寸で渡そり但し渡さぬ。互ひの勝負は太刀先ぞとするりと抜て打掛けば。
左衛門得たりと抜合せ爰と最期と切結び。相方深手と負ぬれと只切なきは富之助。左衛門
方ふは由縁なし由縁はあれど兄分とは。今宵の仔細で助けられず好はあれど。左衛門が思
はん所も耻らしく。太刀とば持たる斗ふて迂漏々として居る所へ。ゆうは兩手ふ酒肴盃添
て河原へ出。是々皆さん手が悪い。私獨りと跡ふ置さりとは悪いあされ様。座敷で呑も古
めのしふ月様と行燈ふして。河原の涼みも面白うるさあへそこには居さんぞと。何心なく
来て見れば三人みすみみ立乍ら。血ふ染て面影變り石火の如き太刀影ふ。はつと轟きあ、
悲しやと一時ふ。土手より河原へさづぶと落わなへ靈ふて居たりけり。備後は深手と負ぬ
れをゆかが聲ぞとられしも。左右の手とあげ待たへ。迫も互ひに遁れぬ命令暫らくと
太刀と引敵にも引うせ。見らるゝ如くの仕合様子は段々斯仕た事。最早命はあ
らざれどもそなたと身共と譯のない。一通とば富之助ふりとへ言譯して呉やれ弟具ふ様
子と聞け最期と安うさせて呉。この頃の頼むと云聲ふゆのもうやうへ心付。叔は左様のはめ

られた富之助様。全く私と備後様微塵も譯は御座んせぬ。おまへお惚れたと云事と左衛門様ふ頗んだりや。幸ふれも惚れて居る兎角備後と退するてだて。斯々せよとの仰故今宵の様ある座敷つき。証據ふば下者の起請。命は富様まいる是々下にはゆうとあり。斯した工も左衛門様晝の喧嘩けんかみ駕の者。武士ふ仕立た頬の喧嘩。様子は斯じやが是はまわひよん。事じやと涙にくれ。ひれ伏てこそ居たりけれ。始終しゆうと聞て富之助ハサト驚き太刀振直し身繕。懸故とは言乍ら扱々己れは悪人哉。サア立遁れぬ所ぞと詞とうけられすつと立。己等兩人と打殺し切腹きつぱくとぐれば本望なり。己れ素丁稚遁すでぢとんさじと。なぐる太刀とば受損ヒ右手の肩かた先斬下られ。彼所へどうを伏しけると備後は弟助だすけけんと。手と負ひ乍ら切結ぶ。左衛門は勝ふ乗り。まくり立たく切きて廻れば兄弟は。爰と切ぬけ彼所とくゞり亂れわひとぞはげみぬる。然れ共左衛門手練の大兵思ひ切りたる太刀打ふ。兄弟あやうく見へければゆうは見る日の懲しあふ。切きては心の勵さがぞと思心やついたりけん。こぶじきろうの肴さかなと水と汲くみてよつとはうけ。あやうく見ゆればちよつとは懸け。石と拾ひて碟にうつ一念たちまち通じけん。左衛門遂には眼まなことひさがれ太刀をじもどろみ見へけると。弟くゞつて飛達ひだつへ細

首ちうに打落し。左手ふ提さげたぢくと。備後が伏たる傍に置。涙と共ふうきふとしなりとては面目ふやわらぬ妬と短氣故。思はぬ御難義懲る事耻うしいと申さうう。残多のこひと申され言語に盡つくぬ無調法。日頃の好よと思召最早命はないものぞ。只一言免めんすとの言葉と聞せてたび給へ。夫と冥土の土産にせんこし。曉兄様備後殿と。世ふ陸く手と合せ又涙ふぞ咽びける。備後は深手と負ひ乍ら莞爾と笑ふて頸引寄せ。さうだのした潔きよや。懸の今の一言や妬ねらひと云ふは思ふら。短氣は年端のゆうぬ故。何にしに恨み申べさ。ゆうが言譯して呉くれや恨の無實むじと受ながら。冥土の旅ふ趣うば幾斗いくと愁うるべく。一分も立たたせ方とも仲なかと直ただて死しそる事。冥路めいじゆも心安あんきぞとよ。然り乍ら殘念ざんねんあはやがて知行しゆぎょうに有あつうせ由々敷姿ひらがまと見ぬ事が是のみ悲ふ思ふはと。嬉うれしきにも悲きにも只先立さきは涙なり。弟も嬉うれし涙ふ暮くわ。言譯もないよしなき事と思そなよ。千萬石の知行しゆぎょうより今の詞が身の譽。扱政左衛門は思ひの儘のまふ討負うけせ。浮世ふ殘る事はなし御手もうそう候は。一先退のも退れんの見參みさんすれば手ても重おもし。是あて御自害なるべくと尋ねば。備後領さうだ、假令此場のと遇たり共。人と害あがし事をれば助すけのるべく道ならず。なまなういらぬ退立のどころく所々のしにとせば。却かて悔くやのるべくに是

おて切腹致すべし。然乍ら右手の小腕の深疵寒氣故ふや痛み強し。なれど是では深よく腹切る事も覺束なし。其方は見れば手も薄し介錯と頼むなり。兎角する間ふ夜も明ん互ひの最期を急ぐべし。口惜や其方と。見立て死ぬべき身ありしに斯様ふ深手と負ひぬれば。思ふた斗甲斐もなし見苦ふない様に。富之助頼ひぞや。盡せぬ名残はいつ迄も同じ道なる死出の山。三途の川ふて相待と。指添抜て押頂き左の小脇へ差込で。引廻さんとは仕け共。寒夜ふ凍え手は痛む。最早叶はぬ弟と。首さし伸て苦さと見るふ目も暮心さえ。何處に太刀と當つべきと涙片手に頭搔落し。太刀とて咽返り流涕焦れ居たりしが。逆も角てもあられぬ身暫も最期と急がんと。既ふ斯よと見えけるが。今まで暫し。世上の人明なば見物評判し。沙汰せん事の耻のしと敵の首と差貢。石の狭間にゆり立て兄の首と羽織ふ包み胸紐取てひつくゝり。膝の上ふるを乗て。差添抜て心もと。さすがは武士の最期のしが田と驚す斗なり。ゆのは姿の濡衣絞り兼たる諸袂涙と共に立踊り。斯と告れば主人と始め。人々是はと驚き騒ぎ思へば惜き面影と。云聲ばかり東雲の松と塘の群鶴可愛くと明渡る。夜明の霜こそ果敢なけれ。

色男加茂侍終

明治廿七年六月二十日印刷

(戯曲叢書)
(第二十冊)

(定價金七錢)

發行者 早矢仕民治
印 刷 者 松本秋齋
發 兑 元 丸善書店
全

賣 剖 審
神田南神保町内
神田裏集館内
京橋彌左衛門町 上黒雲堂
芝南佐久間町 中栗東海屋堂
神田區表神保町 横濱演武
本郷元富士町 本郷四丁目 盛春
神田錦町一丁目 朝陽堂
横濱大坂北久寶寺町 丸善書店
京橋大坂都 有斐閣
本郷分社堂 博文林
吉岡文庫
大久榮書店
黒屋堂

叢書曲一冊 八百屋お七、三世二河白道合本

定價七錢 郵稅二錢

日本文學の極粹は淨るりなり
上下を通じて何人も妙味を知得べきは淨瑠璃なり
雅俗と撰はず文章の好摸範と爲し得可きは淨瑠璃也
小説財料の寶藏也云ふべきは淨るりあり

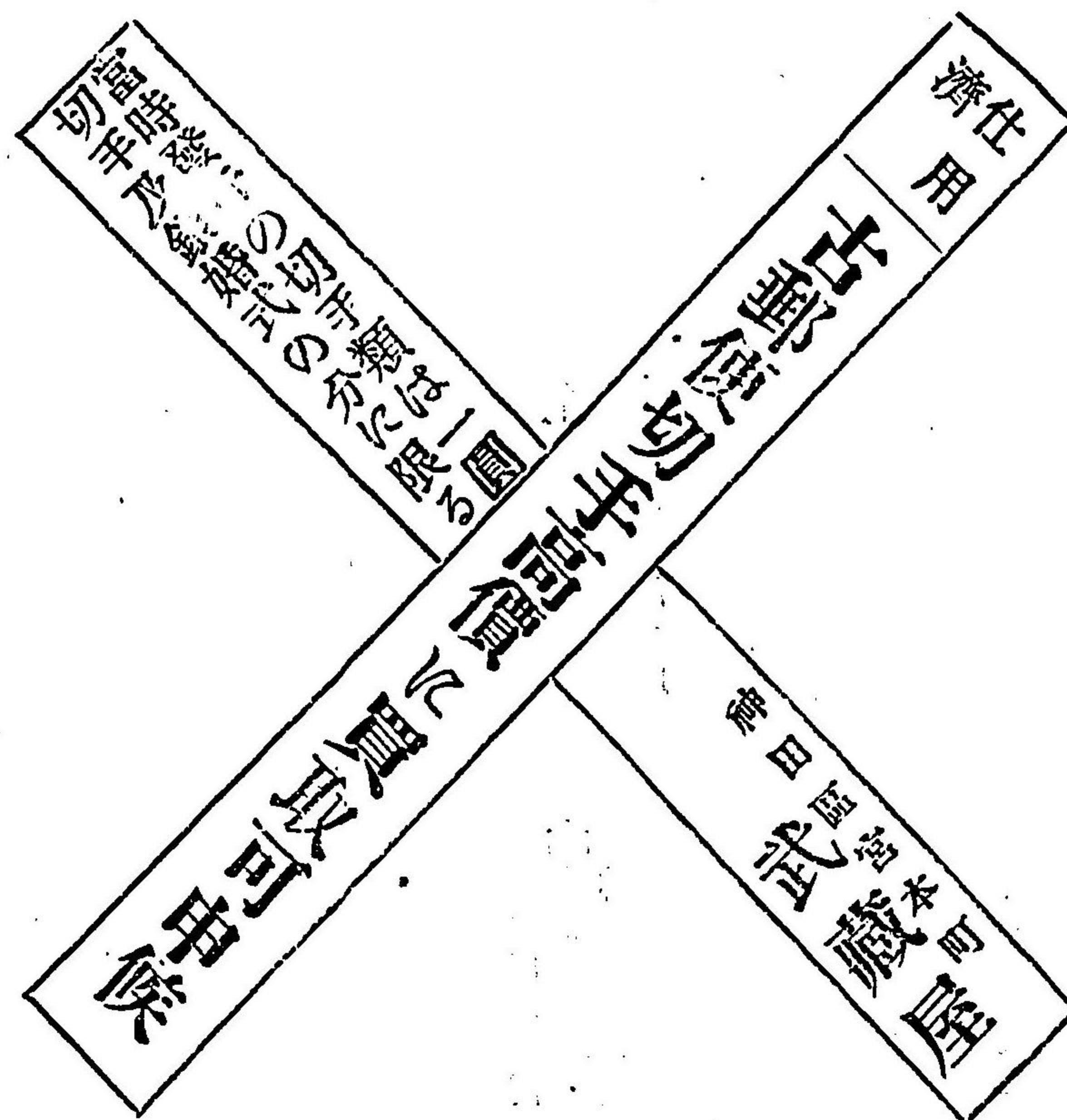
淨
瑠
璃
本
目
錄

活板摺美本

此淨るりの妙味を全く知らんと欲するの諸君は弊店出板の淨るり本と一緒に讀あれ

發行所
武藏屋叢書閣

神田區宮本町五番地



近松時代淨瑠璃

(自正徳五年十二月
至享保四年二月)

一冊定價廿五錢郵稅六錢

目次 ○國性爺合戦 ○國性爺後日合戦 ○日本振袖始 ○曾我會稽山

○傾城酒呑童子 ○善光寺御堂供養 ○本朝三國志

めさよし新聞評五月 情死文學の泰斗近松林子の著作は既に世に行はる本書は其中の時代物なる國性爺合戦、國性爺後日合戦、日本振袖始、曾我會稽山、傾城酒呑童子、善光寺御堂供養、本朝三國志の七種と蒐めたるもの也故に苟も日本淨瑠璃中祖の文章と知らんと欲する者の坐右に缺く可らざるは此書也

改進新聞評五月廿二日 ●古院本の發行所として知られたる神田明神前の早矢仕書店よりが販て發行せしもの、内巣林子の著ふ係るもの七部と合本として賣出したるものなるが此編中ふ載る所は翁が六十三歳の正徳五年より六十七歳の享保四年に至るの五年間に於て著せしもののふて即ち國性爺合戦、同後日、日本振袖始、曾我會稽山、傾城酒呑童子、善光寺御堂供養、本朝三國志等にして何れも人口ふ膾炙せる傑作中の傑作と集めたるものあれば苟くも斯文學ふ志わる者は古本屋に廣く原本と搜索そるの煩と避け坐ながらみして翁の傑作を

見ると得べし

國民の友評二百廿七號 ●近松巣林子の世話物は萬口歎賞後人の企及とする所あらず。而して其時代物の如きは寧ろ彼が長所あらず。今ま翻刻書肆叢書閣が近松時代淨瑠璃と集めで、翻刻したるは、益し世話物と措て時代物と薦むるふはあらず。飽くまで世話物と翻譯したる者として、滑稽的ふ變調夢幻的の淨瑠璃と一覽せしめんとの意なるべし。

二六新聞評廿一大日 ●本書は巣林子が正徳五年の著ふうる國姓節合戦を首とし草保四年に上梓せし本朝三國志と以て結尾として全編凡て七編より成れるもの坊間活版の翻刻は實ふ本書と以て開始とと亦以て其稀書なると知るべし。

小日本評廿一日 ●近松の淨瑠璃が今日の芝居あならぬとて攻撃するは昔の戦か斬り合ひでありしとて笑ふやうなものの野暮のく骨頂なり近松以後是れ程の文章は舉じて誰が與似致せしや馬琴とて三舍と遊くると況んや其外々や先きの世話物と一冊となし今又時代物を一冊となし實ふ文學者必携と云ふべし櫻痴學海諸氏チト此本と讀まれては如何。

近松世話淨瑠璃

完二冊 定價每冊廿五銭
郵稅每冊六銭

上卷 目次

○曾根崎心中 ○源兵衛薩摩
○五十年忌哥念佛 ○市郎衛門心中一枚繪草紙
○堀川浪の鼓 ○與兵衛卯月の紅葉
○伊達染手綱 ○おもむけ心中萬年草

下卷 目次

○夕霧阿波鳴渡 ○梅川忠兵衛冥途の飛脚
○館の權三重帷子 ○山崎與次兵衛壽門松
○小はる心中天の網島 ○女殺油地獄
○伊左衛門 ○平兵衛生玉心中
○小かん ○福平次生玉心中
○淀鯉出世淨瑠璃 ○心中重井筒
○與次郎心中 ○茂兵衛戀八卦柱曆
○心中卯月の潤色 ○小女郎博多小女郎漁枕
○平兵衛心中 ○小女郎心中
○宗七博多小女郎漁枕 ○心中博庚申
○小女郎漁枕 ○心中博庚申
○治兵衛心中
東京新報評明治廿五年五月五日 ●從吾所好、其二十三、抱一庵主人、叢書閣『近松世話淨瑠璃』

昨暑熱俄るみ加はる午下任意の文と爲り罷むて隙若一疏せんとする時刺と通するものあり延て見るふ老撲閑雅の人袁然たる一本と余に致し膝と進め曰ふ先生余が十年の丹精と味ひよと把て之と繙くふア、是れ巣林子一代の作のうち其所謂世話物大概と網羅せるもの間はずして知る此人是れ叢書閣の主人早矢仕民治氏なると天下快車専ら然れど其篤厚の一向ふ利ふ奔らず懇ろふ遺書と拾ふて之と鮮明なる印版に上するを見るは吾徒心に快さはあらず巣林子の作存するものは存して多くあるも其獲難きものふ至りては本邦を一本と存せるや將た存せざるやも圖られざるなり早矢仕氏もるはち或は遠く書と遠國の古書を飛

四

はして之と索め或は素封の家の秘庫み就きて之と臍寫し拮据勉焉迄ふ十年を費して世話物語
二十三種と算めわづらふ卯月の潤色（此序今は原本を）、笠屋三勝二十五回忌、助六上巻千日寺心中の
三本と缺くと憾みとするのみ其志實ふ多とそるに足る、方今の文家が勤もすれば世人の嘲笑
笑と招くの原は堅實の志に乏きふ由るつねに多きなり、ア、文々爲るものあじて文と版す
るものふ如うざるべけんや、主人辭し歸るとき余は階段に立ち其後背と望み慨焉たるもの
之と久うす（以下略す）

關東評　元錄の昔し平安に近松門左衛門なる人あり當時の淨瑠璃語り竹本義太夫の爲め
めふ新作せし戯曲は殊の外の名文にて其道行などは伊勢源氏の俗とうつしゝうも俗間の流
言とも可笑しく書速ねたれば貴賤男女老若の區別もなく珍重したる事は讀者の千萬御承知
の事なるが東京市神田區宮本町の書肆早矢仕氏好んで之と梓に上し其の元錄十三年より草
保七年に跨がる集林子の世話淨瑠璃と合せて賣出したれば日本文學の真相と知らまく思は
や先づ同書を購讀をることを宜しうらん

近松淨瑠璃本(戯曲叢書)時代物の部

世話物の部

○○心 中 天 の 綱 島 合 本

○○おさん 蔵 八 卦 柱 曆

○○今 宮 心 中

○○あさひ 卯 月 の 潤 色

最明寺殿百人上脇合本なり

百合若大臣野守鏡合本なり

日本人評 明治廿三年一月十八日 ●英のシェクスピアは各國共に尊んで古今絶無の詞宗をあす是れ何の爲の蓋し其意匠の緻密迫神にして語辭の穿眞なる爲のみ其「シーザー」「マクベス」「ナセロ」等と讀めば眞に數百年前數百千里外の人々に逢ひたる感と起となり是れ即ちシェクスピアの古今に無比なる所以あれども退きて考ふるふ未だシ氏の著と繙うざるふ余輩の多くは既ふ惱裏に其巧妙と描くなり何となればシ氏は各國人一般に賞揚する所なればなり。而して西洋崇拜の熱度高まる丈け益々其巧妙と感するなり所謂買被りと爲し居る者も之れなしとは保し難うらん我近松氏の如きも之と熟讀観味するときは其意匠の幽邃巧妙なること實ふシ氏の「シーザー」「マクベス」等ふ劣らざるものあり只社會の程度風俗の差違よりして彼が著は王侯貴人百代の後ふ之と愛誦し此れが著は空しく東洋孤島中の一部分の人々知らるゝのみ而して其中ふも既に湮滅ふ歸せんとするものあり豈ふ惜むべきの至りならずや早矢仕氏之れと憂ひ逐次翻刻して之れと後世に傳へんことを計る美舉と云ふべし此頃は西洋の小説とさへあれば意匠も組織も淡純無味なる者と尙且つ餓虎の肥兎と争ふ如くふ賞讀して却て己れが國人中既ふ之ふ幾等超ふるの著あると知らざるとは人心程奇妙なる者は

なしと言ふべし

朝日新聞評 明治廿二年十月三日 平安堂著作出版としてその第一番として刊行せしもの、由なるが成るべく世にその類本少きものより擇べるにや今回は此源氏十二段と天智天皇との二冊發児せられたり近來日本文學の王政復古といふことにて、タな肩屋が羅市ふはあらねを矢鱈と虫入澤山の古本ふのみ目と若けることが流行ることながら同じ元祿穿鑿の道樂の中にありても此等は誰ありて不の字と言ふものなるべし澤山發児わられて好し

貴女の友評 明治二十二年十二月十五日

●院本の著者にてその名と知られたる故人近松門左衛門氏が前後著されたる院本その類甚だ多しと雖も日と經るの久しき遂に散亂し今日ふ至りて貰殆ど將にその迹と絶つに至らんとす雖ふ丸善近松著作全書と題し同氏の著作ふ係る院本と翻刻し逐次之と發行せんと計畫せられたりしも時期未だ到らざりしと以て僅のふ六種と上梓せしのみふて中止せり然るふこの頃再び近松翁著書と題し天智天皇十二段の二本と翻して發行せり文章と趣向とは今更多く辨せずがな書肆が時期ふ投じたるの機敏と漸く將るにその跡と絶たんとするの今日ふ此舉ありしと祝賀せるなり

學の花評 明治廿三年十一月發 ●誰の言ふ日本の文學は幼なりと然れども笑んを知らん東洋のシェクスピアと以て目するも過評ふ非るべく近松翁は幾多の名著と存して今や益々日本國內其聲名赫々たらんとは看よ翁が著作譬へば淨瑠璃の如きに於てすら尙能く人と感動せしめて彼の寄席ふ義太夫師が幾多の人々と喜歎せしむるふ非すや其濃淡粗密或は喜ぶべく愛すべ

く或は痛むべく悲しむべあるのありて氣韻の清秀純逸なる實ふ日本特有の名文といふべし
シエクスピアの「オセロ」何のあらんリットンの「クレムベス」又何のあらん吾人は如何ふ
しても世に翁の著作を讀過して必ず一掬の熱涙と揮はざるが如き無神經のものあるべきと
は信する能はずさりながら憾むらば只此名著をして終ふ東洋孤島の一部を知らるゝのみ
加ふるふ其中にても幾んを湮滅ふ垂んとしたるのなきふ非す豈惜ひべきのとに非ずや偶
々早矢仕氏之と號き續々出版して博く世ふ流布せんとする其舉や眞に美なり只翁の著は孔子
の春秋能く後進の一筆とだふ加ふべからざるもの却て彼是批評するは吾人が本意ふ非らず
氏が美譽と併に翁の傑著たると幾んを讀辭ふ苦まんとす

時事新報評 ●國性爺後日台戰 近松叢書の一部として例の叢書閣より出版せり近松
の作のうちみて左程の上出來ふわらず心中天網島杯よりは遙か劣りたり去れを結構の大ふ
して目先の替りたると國性爺が義侠の戰と仕組みたるとふ依り竹本座みて初め不採りた
けたるときは思ひの外の人氣と博し百日曾我と共に稀世の珍書と云はれたるよし文學ふ志
す人は讀んで見るも可ならん

報知新聞評 ●故近松氏の作、例もながら韻情双絶、一字苟もせざるの趣あり、讀
んで卷と終ると忘る、方今藝苑新著佳作揃々充つて丸善武藏屋二書店の殊の此書と利
行そる者故なしと謂ふべからざるなり

改進新聞評 ●今回發兌の分ふは近松翁の『冥途飛脚』と『夕霧阿波鳴渡』と合せたり

此内阿波の鳴渡は名高き夕ぎり伊左衛門の院本として世間之と藏する者尠し發兌元叢書閣
四方と搜索してやうやく一本と得たれを惜ひ哉前後二ヶ所脱葉してある事なし依て完全な
る原本と藏する入わらば其缺と補はしめんと江湖ふ乞へり書肆の熱心愛すべし（附註此
完全）

名家傑作の部

戯曲叢書

第十五冊

高三世二河白道 尾八百屋お七 紀海音作

心中二ツ腹帶 未廣十ニ段 紀海音作 合本

近松門左衛門添作

太平記 大塔宮議鎧

綱目 戲曲叢書 第二十冊 井筒屋源六 漢文

男色加茂作 錦文流作 合本

九

十

挺して帝と輔佐し六波羅の奸惡と斬らんと圖り遂に逆人親王と誅するに至るまで字々悲愴宮が御淚の珠と聯ねし素より皮想作者の金て及ぶ所ふあらず

大坂東雲新聞評 ●(上略)此作は全篇と七段ふ分ち大塔宮皇室の衰頽と憂ひ鬱然身と國民の友評 ●大塔宮驥鑑 近松門左衛門の著作と翻刻せり以て有名なる神田叢書閣は竹田出雲の作と翻刻せり吾人は今世の文學者が此等の舊と涉獵せんことと切望す

改進新聞評 ●大塔宮驥鑑 神田宮本町の武藏屋は近松翁の院本ふ限らず出雲、半一、海音、一鳳、等の著作ふ係る院本とも出版する由ふて今回は竹田出雲の初作ふて近松翁の添削と經たる大塔宮驥鑑と發賣せり有名なる切子燈籠の齋藤太郎左衛門なれば面白しと云ふも既ふ贊なり

東京新報評 ●丸本翻刻の本家武藏屋は近松門左衛門の著作と大方は摺り終り是れより他の名人高手の作と發刊せるよしとて今度は紀海音作心中二つ腹帶及び末廣十二段の二種と合本として摺り出したり相も變らず製本美麗

早稻文學評 ●淨るりの翻刻に熱心ある叢書閣、近松門左衛門が傑作を世話時代共に大うたは刻しつゝてやうやく紀海音ふ着手したり海音も又一代の名匠巢林子ともて小袖翁とせんの海音はボーモント、フリッチャードこの作家なるべし近松と品せむとする者は必ず是とも讀まさるべからず

新編大和文範 再版中

定價二十五錢 郵稅六錢

●鎌倉三代記

●男作五鴈金

日錄 ●御所櫻堀川夜討

●新板歌祭文

●仁德天皇萬年車

●金平法問評

朝野新聞評 ●文耕堂三好松洛合作の御所櫻堀川夜討、近松半二作の新版歌祭文、紀海音作の鎌倉三代記、竹田出雲作の男作五鴈金、錦文流作の仁德天皇萬年車、及び金平法問評と集めて一書となせるものは即ち此大和文範あり古來名家の作と集めたるものとて字々一として金玉あらわるはなく若し赤帝威と擅みするの日佳人と共ふ縁際深き處ふ臥し以て之と繰うば當ふニーグスピーヤと誦シルレルと謳ふの樂に増すべし

改進新聞評 ●舊編大和文範ふ比して選擇の眼孔同日の論にわらず大才と抱懷して竊ふ大笑界ふ萬世と弄しる戯作文壇の諸英雄是より浮ばん本篇載する所(中略)の六部となり就中三代記の如きは海音中の出作なるを發行所は京橋ふ富貴館神田に於て叢書閣

○小 説

梅蕃里谷峨作

○傾城買二筋道

前篇後篇 三篇合本 全一冊 定價金十二錢 郵稅二錢

婉切且つ凄絶ある日本無双の悲哀小説谷戻の傑作と讀んで西鶴巣林子馬琴以外ふ又此妙文字あると悟れ

亞細亞評 の寛政年間、梅暮里谷峨作の翻刻なり。其の原作の價值は。發行者の緒言み
盡せり、眞正の懇愛ふ近き情愛と寫したるは。もの徳川末世紛々たる雜籍の間。娘節用と
此書のみと云ふ。當時の風として事皆狹邪猥瑣の事に涉れど。浮靡に流れざれば良家士女
の讀むふも適す。印刷は極めて鮮明、校訂舊本よりも最も行屆きたり。

新評戲曲十種

依田百川先生輔著
新評戲齋

一谷齋軍記
石屋之段

一 文 英 佛 國 民 法
一 歌 曲 再 版 塔 補 は 日 本 音 樂 早 學


○雜書

翻	梅田磯吉編	全一冊	郵正郵定郵定	一冊	石谷歎軍記
刻			稅價稅價稅價		
			七六十五二十		
			十十八		
			錢錢錢錢錢錢		
				忠臣講釋	喜內住家之段
				一冊	
				郵正稅價	
				二廿銚錢	

發行所

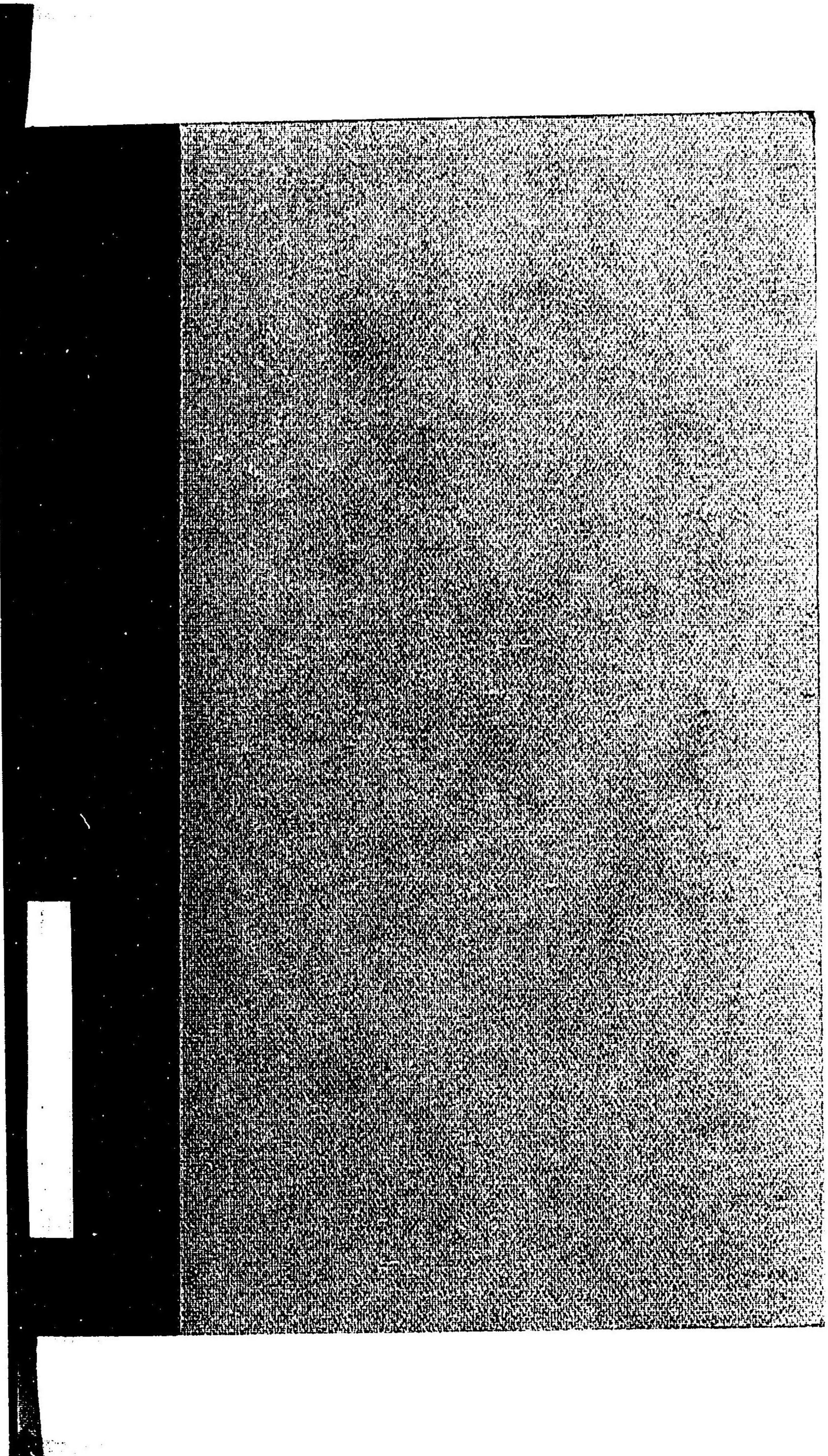
五神田區宮本町
番地

十三書閣



4K-19

江松時代
言告
印



井筒屋源六恋寒晒
男色加茂侍

国立国会図書館

912.4
N854i

088183-000-4

912.4-N854i

井筒屋源六恋寒晒・男色加茂侍

武蔵屋叢書閣

M27

DBI-0006

